

## 嶽麓書院藏秦簡の形式とその書風

The form of the Qin Slips (秦簡) Collected by Yuelu Academy (嶽麓書院) and their style of handwriting

横田 恭三  
YOKOTA Kyozo

### 要約

二〇〇七年、湖南大学嶽麓書院は、梱包された大量の簡牘を香港古玩市場で購入した。その数量は、のち某収蔵家から寄贈されたものを含めて全体で二一七六個の番号になる。それらの研究成果として『嶽麓書院藏秦簡』が現在までに総計五冊出版されている。内容は①質日②為吏治官及黔首③占夢書④数⑤為獄等状四種⑥秦律雜抄⑦秦令雜抄の七種である。

本論考では、嶽麓書院藏秦簡の書風を内容ごとに整理し、その特徴を探った。方折体を中心としながらも、長脚に作るものや横画を湾曲させるもの、払い出しを紡錘形に作るもの、横画に波勢を持たせるものなど、それぞれバリエーションが豊かである。一つの墓葬から出土したものであろうが、書写年代の違いのみならず、複数の書き手の個性や書写習慣の違いがそこに反映されていたことが分かる。とりわけ「占夢書」の使用文字は一般的な秦系文字とは異なっ

ていることが確認できた。

本論考は、現地を訪れて実見したことを踏まえ、嶽麓書院藏秦簡における書風のバリエーションの豊かさと特異性を考察したものである。

### はじめに

二〇〇七年十二月、湖南大学嶽麓書院は、梱包された大量の簡牘を香港古玩市場で購入した。その数量は、番号で二一〇〇個、完全なものは一三〇〇枚余りにのぼった。その翌年八月、香港のある収蔵家より番号七六個（完全なものは三〇枚）の竹簡を寄贈されたことにより、計二一七六の番号の簡牘が揃った<sup>註1）</sup>。

これらを洗浄して整理するとともに、全国から簡牘研究者を集めてそ

の真偽を検討し、併せて材質検査を実施し、秦代の簡牘であると判定した<sup>註2</sup>。『文物』二〇〇九—三に第一報が伝えられ、その後の研究を経て、

二〇一〇年十二月、上海辞書出版社より『嶽麓書院藏秦簡』(壹)が上梓された。以来、二〇一七年までに五巻が出版され、その間『嶽麓書院藏秦簡 壹—参 文字編』(二〇一七年)も上梓されるなど、その成果刊行物が陸続と世に送り出されている<sup>註3</sup>。

『嶽麓書院藏秦簡』(壹)～(伍)の内容は、以下の通りである。

第一巻…「質日」「為吏治官及黔首」「占夢書」

第二巻…「数」

第三巻…「為獄等状四種」

第四巻…秦の法律条文

第五巻…秦の律令(弍)

これらの文字の書きぶりをつぶさに観察すると、その内容によって顕著な相違が感じられる。これまで出土している秦簡は複数あるが、例えば、睡虎地秦簡や里耶秦簡の方折体の書きぶりと比較すると、共通する書きぶりもあれば、まったく違った書きぶりも散見される<sup>註4</sup>。

本論考ではその字体や書きぶりに注目し、考古学的発掘を経た簡牘と比較し、当時の書風の多様性について初步的な考察をする。なお、資料整理の都合上、『嶽麓書院藏秦簡』(壹)～(肆)ならびに『文字篇』をもとにその内容を検討し、第五巻に関しては次の機会に譲ることとする。

## 一・簡牘の形式とその内容

当該簡の大部分は竹簡で、ほかに番号で三〇個の木簡が含まれていた。比較的完整なものは、長さ①約三〇センチ②約二七センチ③約二五センチの三種がある。簡の幅は五～八ミリメートル、編縄の位置は①上・中・下の三箇所②上下の二箇所③二種類である。簡上には編縄痕が残されており、肉眼で確認することができる。また編縄の方法についてはやはり二種ある。一つは先に抄写して編縄したもので、これは文字の上を覆うようにして編縄痕があることから抄写後に編縄したと推察できる。もう一つは先に編縄してから書いたもので、どの簡も編縄の位置にはまったく文字は書かれていない<sup>註5</sup>。

一般に竹簡の竹黄面を用いて書写されるが、当該簡のいくつかの背面には「□七年質日」「廿四年質日」……などの文字を見ることができる。

これらは編名にあたるものが確認されたため、これをもとにおおむね七種に分類している(表1参照)。

- ① 質日<sup>註6</sup>
  - ② 為吏治官及黔首
  - ③ 占夢書
  - ④ 数
  - ⑤ 為獄等状四種
  - ⑥ 秦律雜抄
  - ⑦ 秦令雜抄
- ①②④は簡の背面上に標題が記されていたため編名を確定できたが、

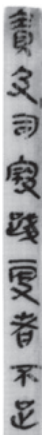

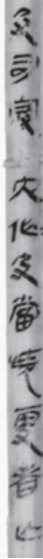


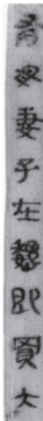






| 秦 律 令   |   |  | 秦王政時代の司法文書  |  |   |   | 数   | 占 夢<br>書  | 為 吏<br>治 官<br>及 黔<br>首   | 質日<br>② 秦 始<br>皇 三 五<br>年   | 質日<br>① 秦 始<br>皇 二 七<br>年 と 三<br>四 年   | 名<br>稱    |
|---|---|--|---|--|---|---|---|---|--|---|--|-----------|
| 第三組   | 第二組   | 第一組  | 第 四<br>類  | 第 三<br>類   | 第 二<br>類  | 第 一<br>類  |   |   |  |   |  |           |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  | 簡牘の図版（部分） |
| 108 枚   | 178 枚   | 108 枚  | 9 枚   | 27 枚   | 73 枚  | 136 枚   | 236 番号  | 48 枚  | 80 余 枚   | 160 余番号   |  | 数 量       |
| 27.5 cm   | 27.5 cm   | 29 ~ 30 cm   | 不明  | 22.9 cm  | 25 cm   | 27.4 ~ 27.5 cm  | 27.5 cm   | 30 cm   | 30 cm  | 30 cm   | 27 cm  | 簡 長       |
| ?   | ?   | ?  | 0.6 cm  | 0.8 cm   | 0.5~0.6 cm  | 0.6~0.7 cm  | 0.5~0.6 cm  | ?   | ?  | 0.5 cm  | 0.6 cm   | 幅         |
| 2 箇所  | 2 箇所  | 3 箇所   |   | 2 箇所   | 3 箇所  | 3 箇所  | 3 箇所  | 3 箇所  | 3 箇所   |   |  | 編 縄 痕     |
|   |   |  |   |  |   |   | ○   |   | ○  | ○   |  | 標 題       |

表 1

③⑤⑥⑦の背面には何も記されていないため、整理者が暫定的に編題を付したものである。

# 「1」質日

表面は六段に分欄されており、その形式は湖北省荊州出土の周家台秦簡の「歴日」によく似ている<sup>〔註7〕</sup>。編号一六〇余りの簡。いくらかは残損した部分を有するが、大部分は完整な簡である。ただし、残簡とはいえ干支を記した文字部分はいくつと認識できるため、排列に関しては妨げにならない。簡の形制上、大きく二種に分類できる。

① 秦始皇二十七年と三四年の記事。長さ約二七センチ、幅約〇・六センチ。

② 秦始皇三五年の記事。長さ約三〇センチ、幅〇・五センチ。

# 「2」為吏治官及黔首

整理者ははじめ「官箴」と命名したが、のち背面に書かれた標題の発見によって「為吏治官及黔首」と改めた。なお、黔首とは人民のことである。形式からみると、三段もしくは四段に分欄されて抄写されている。八〇枚余りの簡。長さは約三〇センチ、幅は報告なし。三箇所に分欄されているが、その痕跡は多く文字上に覆い被さっていることから、抄写後に編綴されたことがわかる。

内容は睡虎地秦簡「為吏之道」に類似していることにより、その過不足を相互に補綴することができるため、秦代における官吏心得に関する

研究に資することが期待される。これらとは別に分欄の形式を用いずに簡全体に文字を記している三枚の簡がある。総字数は一〇九字になるこの簡は、「審用律令」「此治官、黔首及身之要也」などの官吏に関連する語句が記されていることから考えて、おそらく官吏学的主旨を概術したものである。

# 「3」占夢書

占夢とは夢の吉凶を判断することである<sup>〔註8〕</sup>。「昼夢……」「夢亡……」「夢見……」など「夢」に関するものが散見される。四八枚の簡。長さ約三〇センチ、幅は報告なし。三箇所に編綴痕がある。これらの簡は二種類の形式に分けられる。

① 段を分けて抄写したもの。内容は陰陽五行学説を用いて進める夢判断の理論を解き明かしたもので、六枚残されていた。

② 二段に分けて抄写したもの。主として夢象と占語を記載している。その形式と内容について睡虎地秦簡の「日書・夢」と比較してみると、多少の相違が見られる。ちなみに「日書」とは吉凶禍福を占った記録である。

# 「4」数

編号二二六個の簡。これ以外に一八個の残片がある。完全な簡の長さは約二七・五センチ、幅は約〇・五〇・六センチ。簡上には上・中・下の三箇所に編綴痕が見られる。〃数〃とは、数式に従って計算し、答

えを出す、いわゆる運算問題のことである。整理後、「数」簡は算題八  
 一例、単独術文一九例、穀物の兌換比率を記載した簡が三四枚、衡制を  
 記載したものが三枚であることが分かった。細かく分類してみると、  
 租税類算題 営軍の術 合分と乗分 衡制 穀物換算類算題  
 少広類算題 体積数算題 贏不足類算題 句股算題  
 その他残片  
 以上の一〇種に分けられる。

「数」の形成時期は、「質日」に秦始皇三五年（前二二）の記録が含ま  
 れていたことから、前二二以前に成立したものと考えられる。「数」  
 の算題は「九章算術」の「方田」「粟米」「衰分」「少広」「商功」「均輸」  
 「盈不足」「句股」の八章に及ぶ内容で、特有のものが含まれている一  
 方、張家山漢簡「算数書」や「九章算術」にも見えるものもある<sup>註9）</sup>。

「数」の内容を根拠に判断すれば、その一部には典型的な実用算法式  
 を経ない数学的文献の抄本が含まれるが、それ以外は秦代の実用算法式  
 であり、中国早期の数学を理解するのに役立つだけでなく、数学に関す  
 る大量の情報提供であり、かつ他の文献の不足する部分を補うものであ  
 る。中国早期、とりわけ秦代社会における政治・経済・法律・軍事など  
 の研究に対して、重要な資料といえる。

## 「5」為獄等状四種

秦王政時代の司法文書を主要内容とする。整理者によれば、もと編  
 名は「為獄詔状」としたが、材質や書写の体裁からみて四類に分けられ

るため、「為獄等状四種」と改名し、その他数枚の残簡があるので、こ  
 れらを第五類としたという<sup>註10）</sup>。よって収録簡は合計二五二枚になる。

第一類は一三六枚。長さは二七・四～二七・五センチ、幅は〇・六～  
 〇・七センチ。上・中・下の三箇所編繩痕がある。上下二箇所につい  
 て言えば、上端は約一センチ、下端は約一・六センチのところを編繩し  
 ている。中間の編繩痕上に文字が書かれていることから、第一類は先に  
 写して後に編繩したことがわかる。ちなみに簡牘に記された標点には  
 「・」「レ」の二種類がある。どの案件の前後にも「敢讞之」とあり、  
 主文に「疑某人罪」「疑某人購」などの語が見え、下級機関が上級機関  
 に対して法律の適用に関する指示を請う内容である。この点に関しては  
 「張家山前漢簡」の前十三個の案件に類似しており、狭義の奏讞書<sup>そうげんしょ</sup>に属  
 す。

第二類は七三枚。保存状態は良好ではなく、残簡や欠簡が多い。長さ  
 は二五センチ、幅は〇・五～〇・六センチ。上・中・下の三箇所編繩  
 痕がある。内容は以下の二種類に分けられる。①県級の長官が獄吏ある  
 いは令史のために「敢言」形式で書いた推薦文書。②郡府が「謂」形式  
 で命令する尋問案件。これらの二種類の案件も「張家山前漢簡」の案件  
 と類似している。なお、第二類の案件のうち確実なものは、もともと遅  
 いもので秦始皇二十六年（前二二）（九月）であるが、これとは別に  
 秦始皇二十八年の干支と「元年四月」「五年」と思しき記載も見える。  
 なお、「説文解字」に、秦代、「皐」の字形が「皇」に似ているため、「罪」  
 に改めたところがあるが、当該簡は「皐」字を使用している。

第三類は木簡で二七枚。長さは二二・九センチ前後、幅は〇・八センチ前後。上下の二箇所編縄痕がある。内容は、狹義の奏讞書である。第四類は竹簡で九枚。長さは未詳、幅〇・六センチ。第三類と第四類の形制は類似している。内容の一つに、戦闘中に恐れをなして遁走し将軍や士卒の戦没をまねいた案件がある。これも「張家山前漢簡」と類似する。

#### 「6」秦律令（秦律雜抄・秦令雜抄）

報告によれば、秦の法律条文でその数量は一二〇〇枚余りに達するが、内容で分類することができないことから、簡の編縄と長さによって形制分類を行った。その後、簡の文字の特徴と簡の裏面に付けられた切り痕、反転した文字（反印文）などの情報を根拠に整理し、先づ三九一枚の竹簡を選び出し、一卷とし、「秦律令（巻）」と命名した。さらに簡文の内容、字体の特徴などを根拠に総合的に考察し、三九一枚を三つの組に分類した。

第一組 番号一〇八枚であったが、併合後一〇五簡（うち空白簡三枚。文字は残泐し、まったく読めない簡一枚）となった。簡の長さは二九・三〇センチ、幅は報告なし。三箇所編縄痕が見られる。

ほとんどの簡の裏側には刻線と反印文が残されており、これによって元々の状態を復元できる。その中のNo一九九一号簡の背に「亡律」の編題があるため、この第一組簡は「亡律」に関する内容の巻冊であることが分かった。この「亡律」の発見によって秦代に「亡律」が存在するか

どうかの疑問は完全に打ち消され、これによって古代の「亡律」を比較研究することが可能となった。

嶽麓秦簡の「亡律」類の簡の数量は豊富である。その法律条文中には刑徒逃亡や奴婢・黔首に関してのものがあるだけでなく、亡人者（逃亡する人）を蔵匿する事に対する処罰条例や自首者に対する減刑措置も記されている。

このほか、おのおの官府徒隸の逃亡、遷都の逃亡、奴婢の逃亡、居貨贖債など、いろいろな方面の条文に関するものがみられる。

第二組 一七八枚（中一枚空白簡）。簡の長さ二七・五センチ、幅は報告なし。二カ所に編縄痕がある。編題なし。簡の裏側にある切り痕の数量は多くないものの、反印文は多くみられる。報告者によれば、反印文の関係から簡文の前後関係を確定し、同時にその内容の分析を行い、本巻冊を一四層の編聯に復元した。この内容は秦律である。簡冊の編聯順序は「田律」「金布律」「尉卒律」「徭律」「傳律」「倉律」「司空律」「内史律」「奔警律」「戍律」「行書律」「置吏律」「賊律」「具律」「獄校」「興律」「襍律」「閑律」「索律」の全一九種の律文にのぼる。

第三組 一〇八枚。簡の長さは二七・五センチ、幅の報告はない。上下に編縄痕がある。その中の三枚は2つの簡号を合わせたもの、もう一枚は3つの簡号の残片を合わせたものである。また空白簡と釈読できない簡がそれぞれ一枚ある。「内史郡二千石官共令」「廷内史郡二千石官共令」や「内史戸曹令」「内史律」などの語が見えることから、「内史」に関係がある内容と考えられる。



## 二、字形の特徴

第一章では、報告書をもとに第一巻～第四巻までの簡牘について「質日」から「秦令雜抄」の七種に分類されたものを解説した。それらの書体は大半が秦隸であるが、その書風には多少の違いが見られる。王曉光氏は『秦簡牘書法研究』中で、a↘eの五つに分けてその風格に言及している<sup>〔註1〕</sup>。王氏の見解を交えながら私見を述べてみたい。

### 「1」質日

形制上、大きく二種に分類できる。

#### ① 秦始皇二七年と三四年の記事

標題は「□七年質日」とあり、最初の文字が残損していて不明であるが、干支その他から推して「廿七年」と確定できる。標題「廿四年質日」の「年」「質日」は篆法を用いた謹飭な字体で書かれている。標題を本文よりやや謹飭なスタイルで書く例は前漢時代の張家山漢簡も同様である<sup>〔註2〕</sup>。王氏は、この標題の書体について、唯一の小篆による墨書で秦簡中には極めて少ない規範性の高い篆書であると指摘する<sup>〔註3〕</sup>。本文の干支の書体はいわゆる秦隸で、その書きぶりは方形的要素が強く、方折体に分類できる。「□七年質日」の干支の書きぶりと比べて、記事のそれはやや右肩下がりの方が多く見られることから、別手であろう。「廿四年質日」の記事の書きぶりはやや小振りで、かつ抑揚が見られることから、やはり別手と考えられる。あらかじめ全体の干支を書き込んだ簡牘を作成しておき、これを実際に使用する段階で初めて必要に応じて記

事を書き込むものであるから、むしろ書き手が違って当然である。

#### ② 秦始皇三五年の記事

標題「廿五年質日」の字体は、前出の標題「□七年質日」「廿四年質日」と異なり、すべて秦隸で書かれている。本文の書体も秦隸で、その書きぶりも同様に方折体である。干支の書きぶりは三者とも一貫していることから同一手とみて大過ないであろう。ただし、「廿五年質日」の記事の書きぶりは肉厚に作る大振りの文字で、「□七年質日」や「廿四年質日」に書かれた記事の筆者とは別手になると思われる。







### 「2」為吏治官及黔首

内容は睡虎地秦簡「為吏之道」に類似するもので「役人としての心得」を記している。書体は秦隸。書きぶりは方折体に分類できる。なお、一枚の簡牘に三段ないし四段に分けて書写しているが、最後尾に配置された三枚の簡牘は、前述したように上から下まで簡全体に文字を記している。これらの書きぶりも前段のものと同一手である。王氏は、前述の「質日」と同様に穏やかで端正な筆法、一部の文字には篆意が濃厚であると指摘している<sup>〔註4〕</sup>。同一手でありながら、句末に使用する秦特有の「𠂔」字と「也」字の二種を併用している。ただし、「也」を九回使用していることに比べて、「𠂔」は一回だけの使用である。これは何を意味しているかといえ、このときすでに秦では「𠂔」字に替えて、簡略化された「也」字を用いる状況に至っていたが、以前から「𠂔」字を使い慣れ





ていた官吏がうつかり書いたものではないかと推測できる。書の風格は、周家台秦簡〈日書〉〈歴譜〉や里耶秦牘中の規範性の高い書法に近いと考えられる。

### 「3」占夢書



字体は秦隸に違いはないものの、縦長の肢体が多く、とりわけ長脚に作る。もつとも留意しなければならないことは、大西克也氏が「嶽麓書院秦簡をめぐる――赤外線スキャンと『占夢書』」で、すでに指摘するように「『占夢書』の特異性」である<sup>〔註15〕</sup>。大西氏の論を踏まえながら、その特異性を検討してみたい。

「為」（図1）の図版を比較して見よう。占夢書「」は一八例中、一四例見られる。「」は三例で、残りの一例は残損して判断がつかない。大西氏はこの奇妙な字形に対して「『占夢書』というテキストが、その地域性において大きな問題を孕んでいることを予感させる」といい、さらに「秦漢の文字も多様であって、戦国時代の地方的な字形の影響も指摘されている」と述べている。戦国時代の六国の文字には、楚の鄂君啓節や郭店、包山から出土した楚簡に「」字が見えるが、大西氏はこれの略体の可能性を指摘する。それにしても占夢書の字形は簡略化がはなはだしい。さらに大西氏は句末に使用する秦特有の語氣助詞「」に対して「也」の使用（図2）、指示語に秦系の「其」と六国系の「」を併用（図3）、「吾」を「」で標記していること（図4）、このほか占文の内容に言及し、「原『占夢書』は、広大な中国の様々な地域に伝

承され、姿を変えつつ使われていたのではなからうか。」と結んでいる。この指摘はきわめて重要である。当時の文献がさまざまな地域で順次書き換えが行われながら伝承されてきただけでなく、原書に忠実に抄写する場合と書き手が普段使用している文字を使う場合とが考えられるからである。

なお、表2に見られるように、「不」字を六画で書いたり、五画で書いたりしている。また、図5の「渡江河」のように、一枚の簡牘中にさんなずいを「」と「」の二種類を併用している簡がある。書き手の意図を推し量ることはできないが、篆書体の「」とその略体ともいえる「」が併用されてきた時代が予想以上に長く続いていた実態が見えてきた<sup>〔註16〕</sup>。

### 「4」数

書体は秦隸。書きぶりは方折体である。全部で二三六枚になるが、その書きぶりは一貫通貫しており、書き手は一人とみてよい。王曉光氏は、当時における秦隸の主流になる筆法か、あるいは秦隸の典型的な風格に属する筆法であり、睡虎地秦簡にも多く見られる書きぶりであると指摘する<sup>〔註17〕</sup>。しかし、「之」の書きぶりに注目すると、秦隸の方折体に使われる「」と簡略化が進んだ「」との二種が見られる。

### 「5」為獄等状四種（図6参照）

第一類 書体は秦隸。竹簡に書写。報告者によれば、字体の書写風格








































































































































| 里耶<br>秦簡   | 睡虎地<br>秦簡  | 秦 律<br>令 (第<br>三組)   | 秦律令<br>(第二<br>組)   | 秦律令<br>(第一<br>組)  | 司法文<br>書 (第<br>四類)  | 司法文<br>書 (第<br>三類)   | 司法文<br>書 (第<br>二類)  | 司法文<br>書 (第<br>一類)  | 数  | 占 夢<br>書   | 為吏治<br>官及黔<br>首   | 質<br>日  |    |
|--|--|--|--|---|---|--|---|---|--|--|---|---|----|
| <br> | <br> |   | <br> |    |    |   |    |    | <br> | <br> | <br>    |    | 之  |
|   |   |   |   |    |    |   |    |    |   | <br> |    |    | 不  |
|   |   |   |   |   |    |  |    |    |   |  |    |   | 可  |
|   |   | <br> |   | <br>    |   | <br> |    |    |   |    | <br>    |   | 為  |
|   |   |   |   |    |   |   |    |    |    |   |    |   | 其  |
|  |    |    |    | <br> |   |    |   |   |  |    | <br> |   | 毆也 |
|   |   |   |   |    |  |   |  |  |   |    |    |   | 有  |
|   |  |   |   |    |   |   |  |  |  |    |    |   | 言  |
|  |   |  |   |    |   |  |   |   |  |    |    |  | 道  |
|   |  |   |   |   |  |  |   |  |   |  |   |   | 道  |
|   |   |   |   |   |   |  |   |  |  |  |    |  | 行  |
|   |   |  |   |    |   |  |   |  |  |  |   |  | 未  |
|  |   |   |   |    |  |  |   |  |   |    |    |   | 者  |

表 2

| 図 6  |  |  |  | 図 1  |   |  |
|--|--|--|--|--|---|--|
| 為獄等状四種   |  |  |  | 戦国文字「為」  | 占夢書「為」  |  |
| 第四類  | 第三類  | 第二類  | 第一類  | <br>鄂君啓節  | <br>郭店楚簡  |           |
| <br>與   | <br>五   | <br>與   | <br>上   | <br>包山楚簡 |          |  |
| <br>歩   | <br>主   | <br>欲   | <br>言   |  |   |  |
| <br>等   | <br>見   | <br>類   | <br>欲   | 図 2  |   |  |
| <br>走  | <br>父  | <br>盗  | <br>故  | 「毆」と「也」  |   |  |
| <br>追 | <br>扞 | <br>之 | <br>故 | 秦律令 (二)  | 司法 (一類)   | 占夢書「也」   |
| <br>前 | <br>将 | <br>盡 | <br>與 | <br>「毆」   | <br>「毆」   |           |
|  |  |  |  | 図 3  |   |  |
|  |  |  |  | 「其」と「元」  |   |  |
|  |  |  |  | 秦律令 (二)  | 司法 (二)  | 占夢書  |
|  |  |  |  | <br>「其」 | <br>「其」 | <br>「元」 |
|  |  |  |  | 図 4  |   | 図 5  |
|  |  |  |  | 「魚」 = 「吾」  |   | 「渡江河」  |
|  |  |  |  | 馬王堆帛書  | 占夢書   |  |
|  |  |  |  |         |         |         |

はほぼ一致、字形は多く縦を以て勢を取って、比較的伸びのある用筆、一人の手で書かれたものと指摘する。横画は右肩上がりを目調とするが、長い横画は「上」「言」のように、やや湾曲させることによって字形にしなやかさを生じさせている。均一的な太さの線条で、「欲」「故」「危」あるいは「與」などのように長脚に作るものが多い。時代がはっきりしている訴訟の実例はすべて秦王政十八〜二十五年に属している。これは全国を統一する前にあたる。なお、句末には秦特有の語氣助詞「毆」字を六箇所すべてに用いている。

第二類 書体は秦隸だが、その書きぶりは、第一類と大いに異なり、字形は「與」「欲」「類」のように方正で用筆は謹飭である。横画は水平を目調として、「盜」「之」「盡」などのように長い横画には多く波勢が見られる。しかし、運筆の呼吸はさほど長くない。なお、句末には語氣助詞「毆」字を十一箇所すべてに用いている。

第三類 書体は秦隸。「五」「主」のように運筆はやや粗く、字形は長短不揃いであるが、「視」「將」などのように長脚に作るものは、飄々とした造形を醸し出している。報告者によれば、書写年代は秦王政二十二年になるが、文書の格式は比較的古い形式を保持しているという。「占夢書」の用筆に類似している点が見られる。やはり一箇所の句末に「毆」字を用いている。

第四類 書体は秦隸の範疇にあるものの、その字体の根底は篆意が色濃く残っており、他の三類とは異なる。報告者によれば、字形は縦の勢を残しており、一筆中に多く軽重の変化が見られ、起筆と収筆が細く、

中間部が太いという。横画の線条は硬質で方折がベースになっているものの、ときおり左右へ長く払い出す筆画は紡錘形をなしている。用筆はどちらかと言えば緩慢で少しく鈍重である。

第五類 残簡七枚、二八字ほどしか読み得ないし、それともかなり欠損しているため、ここでは省略する。

以上、「為獄等狀四種」五類の書写年代をまとめれば、語氣助詞に「毆」字が使用されているこれらの簡（秦王政十八〜二十五年）は、「也」字が使われている「為吏治官及黔首」に比べて、より古い年代の書写であるといえる。

#### 〔6〕秦律令（秦律雜抄・秦令雜抄）（図7参照）

第一組 書体は秦隸。硬質な線条のものと、太細の変化を見せるもの、あるいは字間をたつぷりとして伸びのあるものなど、種々な書きぶりが見られる。例を挙げれば、「者」は太めの方折体、「学」は伸びのある長脚体に作っている。よって複数の手が交じっていると考えられる。

第二組 書体は秦隸。「官」「欲」などのように、やや細めの線条で筆画はシャープなもの、比較的正方形な字形で画一的な線条に作るものなどがある。やはり複数の手になるものと思われる。

第三組 書体は秦隸。字形は扁平、線条は重く強い。方折体で書かれた「室」「徒」字のように、睡虎地秦簡にも同様な書きぶりのものが見られる。報告者はとくに留意すべきこととして「一枚の簡牘中に書き手が違う現象や同一の律令中に違った書体が併存している現象が見られ












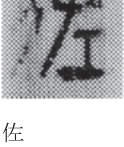
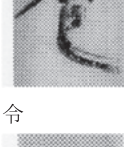
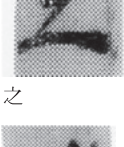

| 秦 律 令  |   |  |
|--|---|--|
| 第三組  | 第二組   | 第一組  |
| <br>官<br><br>者<br><br>室<br><br>皆<br><br>徒 | <br>官<br><br>欲<br><br>諸<br><br>者<br><br>事 | <br>者<br><br>佐<br><br>令<br><br>之<br><br>学 |

図 7

る」と指摘し「ときどき出現する理解しがたい状況」と述べている。整理者の指摘は、第三組の解説中に記しているが、第一組・第二組にも同様なことがいえる。しかし、この現象が起きる理由は、現段階では説明できない。後考に俟つ。

### 三、墓主人の実像と使用文字

考古学的発掘によらない簡牘をどのように扱うか、その扱い方の難しさは上海博物館が購入した戦国簡によって、多くの研究者が経験している。たまたま嶽麓書院が香港で購入した時期は二〇〇七年十二月である。その直後にあたる二〇〇八年七月、清華大学の校友が清華大学に寄贈し

た戦国簡、さらに二〇〇九年、北京大学の校友が北京大学に寄贈した秦簡及び前漢簡、これらはいずれも香港から購得したものであった。上述した簡牘の状態からみて、おそらく湖南省・湖北省地域の墓葬から盗掘されたものと考えられる。

嶽麓書院蔵秦簡の場合は購入時、ビニール袋によって大小八個の塊に梱包されていたという。文字の内容、字体、書風を考察した結果から言えば、確固たる証拠はないものの、この簡牘は一つの墓葬から出土したものと考えてよいであろう。簡牘の内容が、「質日」「数」「秦律令」という面から見れば、張家山出土簡の内容に極めて類似している。また、「為吏治官及黔首」が含まれていることから、睡虎地秦墓の墓主人と同



様に司法と関係がある職務に従事していた人物で、占夢に関心のある官吏だったとも考えられる。ただし一つの墓葬から出土したとみる点に関しては、湯浅邦弘氏はその可能性を認めながら、なお慎重な態度をとっている<sup>〔註18〕</sup>。

字体はすべて方折体を基調におく秦隸であり、その字体に大きな違いは感じられないものの、「不」「之」「為」「言」「止」など一部の書きぶりには簡略化による画数の増減が見られる（表2）。大きな相違は、「占夢書」と「数」において使用されている語気助詞である。当該簡の司法文書や秦律令に見られるように、秦では一般に「也」に相当する語として「毆」が使われていた。しかし、占夢書と数においては「毆」ではなく「也」を使用している。また、「為吏治官及黔首」はこの二種を併用している。「也」を使用する理由については大西克也氏がすでに指摘しているように、「秦国が六国系の文字を受容した」結果だと考えられ、「遅くとも二世元年（前二〇九）には「毆」を棄て「也」を使うようになっていた」のである<sup>〔註19〕</sup>。

以上、書体書風について総合すれば、当時通行していた書体（秦隸）を用いており、文字の書きぶりに個性や習慣の違いがあつて多少のバリエーションが見られるものの、「占夢書」以外は睡虎地秦簡や里耶秦簡の書きぶりと同質の書きぶりであるといえる。

## まとめ

ここまで嶽麓書院所藏秦簡の文字の特徴を考察してきた。香港古玩市

場で購入したもの、つまり考古学的発掘を経ていないため、その真偽を含めて慎重に扱う必要がある。こうしたいわゆる「非発掘簡」の扱い方について、大西氏は「個々の研究者は各自の責任において資料と向き合わないといけない」と述べている<sup>〔註20〕</sup>。

嶽麓書院藏秦簡の書きぶりを比較して見ると、方折体を中心にしながらも、長脚に作るものや横画をかなり湾曲させるもの、払い出しを紡錘形に作るもの、横画に波勢を持たせるものなど、かなりバリエーションがある。こうした現象は、睡虎地秦簡や里耶秦簡にも見られることであつて、けつして嶽麓書院藏秦簡だけの特異性ではない<sup>〔註21〕</sup>。複数の書き手が存在し、書き手の個性や書写習慣によつて書きぶりに違いが見られることがここでも改めて確認された。

ついで使用されている文字に注目すれば、例えば語気助詞「毆」「也」の使用の有無によつて、およそその書写年代を推定することが可能である。

また大西氏が指摘するように「占夢書」の書体は秦隸だが、戦国秦の領域で作られた資料ではなく、旧六国系の地域の痕跡を有していることも分かった。このことは権力者が人々の文字習慣に対して何らかの制約を加えたとしても、規制を超えたところに伝播の実態があり、その痕跡までも拭い去ることはできないことを物語っているといえよう。

二〇一九年夏、嶽麓書院の敷地内にある中国書院博物館を訪れ、収蔵の簡牘の実見した。『嶽麓書院藏秦簡』のカラー図版と比較してみると、原簡の色合いはカラー図版に比べてかなり淡い乳白色であるだけであ

く、原簡の方が一回り小振りで文字自体もいくらか細身に感じられた。

その理由は、図版は脱水処理前に撮影されたものであり、手にした原簡は乾燥を経て一回り細くなったためである。しかし、原簡を実見せずに図版だけを見ても、おそらく文字が内包している深みを感じ取ることはできないだろう。原簡を実見することの重要性を改めて述べておきたい。

最後になったが、本稿は令和元年度の跡見学園後援会外国出張助成費給付を受けて研究調査した成果の一部である。ここに記して関係各位に感謝申し上げる。  
(二〇一九年十二月稿)

## 註

1 番号は、もともと長短さまざまな状態で破碎していた簡を照合する目的で付されたものである。それらの簡をつなぎ合わせると一枚の完全な簡になる場合もあるため、簡の枚数は番号より少ない数値になる。

2 材質検査は、考古学的発掘で得た簡牘のサンプルを準備して素材の年代測定を行ったものである。電子顕微鏡(竹の表面の状態を観察)、電子分光分析(竹に含まれる特有の元素の量を測定)、赤外線解析(竹を分解して得られた糖類の数値)、X線回折(竹の繊維にみられる結晶度の測定)、熱分析(竹の温度差の測定)の五種類の機器を用いて測定した。

3 『文物』二〇〇九―三には陳松長「嶽麓書院所藏秦簡綜述」を掲載する。上海辞書出版社より、朱漢民・陳松長主編『嶽麓書院藏秦簡』(壹)(二〇一〇年十二月)・(伍)(二〇一七年十二月)の計五冊、及び陳松長・李洪財・劉欣欣等編『嶽麓書院藏秦簡 壹―参 文字編』(二〇一七年六月)が出版されている。

4 睡虎地秦簡とは、一九七五年湖北省雲夢縣睡虎地の秦墓(一一号墓)から出土した一一五五枚の竹簡をいう。里耶秦簡とは、湖南省龍山県里耶鎮戦国古城の第一号井戸から出土した約三七〇〇枚の簡牘をいう。どちらも秦隸特有の方折体を主体として書かれているが、その書きぶりにはバリエーションがある。里耶秦簡などは方折体のほか、奔放なものや飄逸なもの、あるいは右肩下がりのもので、波勢を有するものなど、多種多様である。

5 一枚の簡に記録できる文字数には限度があるため、長文を記録する場合、簡と簡とを紐で編んで冊に仕立てた。これを編繩または編綴という。

6 陳松長氏は『文物』二〇〇九―三で、はじめ「日記」の類の内容とみて「日志」と命名した。のち背面の標題によって「質日」と改めた。

7 周家台秦簡は、湖北省荊州市沙市区の周家台三〇号墓から出土した簡牘。その「歴日」は、秦始皇三十四年(前二二三)、三十六年(前二二一)、三十七年(前二二〇)のものである。これも分欄されている。

8 陳偉主編『放馬灘秦簡及岳麓秦簡《夢書》研究』(武漢大学出版社、二〇一七年)は、二〇一〇年一二月に出版された『嶽麓書院藏秦簡「壹」』中で編名を「占夢書」としていたことに対して、疑義を提出している。著者は赤外線写真によるNo四四号簡の背面上に「夢書」二字の残文を発見した。「夢書」二字の上に「占」字を書くだけのスペースがないことから、やはり標題は「夢書」二字であるべきだと主張している。説得力のある指摘であるが、本論考では『嶽麓書院藏秦簡』の記述に基づいてそのまま「占夢書」の名称を使う。

9 張家山前漢簡(前漢・前一八六年以後)は湖北省江陵張家山前漢墓から出土した一二三六枚の竹簡。その内容は「二年律令」・「奏讞書」・「算数書」など八種を数える。「算数書」は、算術と幾何の二つを基礎とした数学の問題と解答集である。

10 張家山前漢簡の「奏讞書」と比較すると、この二つの間に一定の継承関係



があることが窺える。つまり、より古い当該簡は、〈張家山前漢簡〉の原型と考えられる。

11 王曉光『秦簡牘書法研究』（榮寶齋出版社、二〇一〇年）中の「嶽麓書院秦簡書法初探」でそれぞれの簡牘の風格に言及している。

12 張家山前漢簡の標題には、「賊律」「告律」「金布律」など、よく分かる例がある。

13 前出註11に同じ。

14 前出註11に同じ。

15 大西克也「嶽麓書院秦簡をめぐる――赤外線スキャンと『占夢書』――」（『書法漢学研究』第一五号所収、二〇一四年）

16 「シ」の書き方は青川木牘（戦国秦晚期）にすでに見えている。張家山前漢簡にも同じ一枚の簡牘に併用されているものがある。このように長い期間にわたって併用されていた。

17 前出註11に同じ。

18 湯浅邦弘『竹簡学 中国古代思想の探求』（大阪大学出版会、二〇一四年）所収「第三部 新出秦簡・漢簡に見る思想史」で、湯浅氏は「嶽麓秦簡は、その出土地が明確ではなく、所収文献すべてが同一墓からの出土資料であったかどうかはわからない。」と前置きしながらも、「仮に同一墓からの出土であったとすれば、そこに一定の共通点が見られるように思われる。」と述べている。

19 大西克也「戦国時代の文字と言葉――秦・楚の違いを中心に――」（『長江流域と巴蜀、楚の地域文化』所収、長江流域文化研究所編、二〇〇六年）

20 大西克也「非発掘簡」を扱うために」（谷中信一編『中国出土資料の多角的研究』所収、二〇一八年、汲古書院）

21 拙稿「統一秦における簡牘文字の実相――湖南省龍山県里耶出土の木牘を中

心として――」（『書学書道史研究』第十四号所収。書学書道史学会、二〇〇四年）に大きく分けて六種の書きぶりが存在することを指摘した。